

堕ちヒロインに堕とされる2

— 悪の組織のダウンナー系ハカセに搾精管理をされて精液タンクに堕ちる話 —

プロローグ

「やあ、おはよう。目が覚めたかな？」

「戦いでは最強のキミも油断した隙を狙えばあつけなかったね」

「そのためにわざわざ内部に侵入したわけだが……」

「おっと、暴れてもムダだよ」

「私が操られてる？ くっくくく、いやいや、こっちが元だよ。君と仲良くしていた、あの人格は潜入するための仮想人格さ」

「おかしいと思わなかったのか、すぐに打ち解けて、よく笑う明るい女子なんて」

「ふーん、まだ信じられないのか？ おめでたい男だね、君は」

「潜入時につかっていた仮想人格装置はまだあつたな……——んんっ♡」

「えへっ、これで、どうかな？」

「普段の、私だよー！」

「君から、誕生日にプレゼントもらったことも、手作りチョコあげたことも、せーくんぶ、覚えてるよー！」

「んっ、というわけさ」

「君との甘いやりとりは、愚かなヒーローの心理を調査する格好の材料になったよ」

「これで我が組織のハニートラップの質は、ますます向上するというわけだ」

「私の正体は組織の研究者。白衣に、組織が開発した黒ラバースーツこっちが私の正装なのだよ」

「なんのためかっつ？ それは組織の怪人増強のため、実験用の素体を手に入れたからだからさ」

「そう、キミの体だね。表面的なデータは潜入時に取りせてもらったからねこれでやっつ、正義の味方の組織ではできなかつた具体的な検査、実験を進めることが出来るよ。くっくっくっく」

「それじゃあ、検査を始めようか？」

「うむ、拘束具はきちんとは機能してるな」

「君の身体データを管理してたのは私だよ？」

「その能力は知り尽くしている」

「絶対に壊せないように設計してある。無駄無駄」

「それじゃあ、体の状態から確認していくぞ。緊張しなくいい」

シーン一

「ふうむ、やはり引き締まっていたいい体をしている、健康で頑丈そうで、両腕の筋肉もしっかりついて肩幅も広い、ぶ厚い胸板も頼れる感じがして、いかにもヒーローという印象だね」

「ん、まだ私を意識しているのか？」

「くっくく、愚かな反応だが、悪くはない。仮想人格で君に「好き」と言ったときは、一般的な男女の好きの意味だったが、今も私はキミを実験サンプルとしてとても好意的に見てるよ」

「では、ズボンを脱がして、んんっ……男性器の状態をチェックするのでしょうか」

「やはり、まだ使える状態ではないようだな。なにっ？ キミのそれ、男性器のことだよ」

「まずは、立たせないと検査できないじゃないか」

「では、私の手で握って、ゆっくりと扱っていくよ」

「んんっ、だんだんと膨張してきて、太さも長さも増してきているな。海綿体に血流が一気に流れこんで、少しずつ熱もはらんできたぞ」

「よし、これで概ね勃起完了かな？」

「ふむふむ、問題なく機能しているね」

「口では否定しているが、こんなに硬くして、やはり私の手で感じているようだね」

「直接刺激の効果は、かなり高いと判断できそうだ」

「太さと長さは平均レベルか。このサイズでは、女子怪人との慰安用には、使えないかもしれないね」
「けれど、実験や製造用の生体としては、問題ない」

「では、もう少し刺激を与えてみよう。ふむ、一般的な男性だと、言葉での刺激も合わせたほうが効率がいいのだったね。この行為を手コキというのか、ふむふむ声での刺激も必要なのか。理解した……では、シ〜コシコ、シ〜コシコっ」

「そら、そらっ。リラックスして楽しんでくれている」

「その時のデータを全て取つていきたいからね」

「どうっ？ ここが一番反応が強いな。抵抗は無駄だよ、シ〜コシコ、シ〜コシコっ……男性器がビクついて、睾丸に精が溜まってきているようだね」

「袋の重量が少しずつ増してきている。すべて新たに作られた精子だろう。竿先もキツくそり返って感度は良好のようだね」

「さらに先端へ集中して、もっとねっつとりと、扱っていくぞ」

「シッコシッコ、シッコシッコ……そろそろ、どうだ？」

「握りも軽くして、敏感な亀頭を撫であげながら、シッコシッコシッコシッコ。シッコシッコ」

「男性器の硬度も内部血流の蓄積具合もいい数字だ」

「脈拍、体温も上昇。特に男性器周りの温度が上がっているね。もう出しそうなのか？ 黙ってても、私にはわかるよ」

「全てのバイタル値が、射精寸前の状況を示している」

「くふふっ、自分からはしたなく腰も使って、さすがにヒーローの君でも耐えられないようだね」

「自慰に使う道具をオナホールというのだろう。私の手をオナホ代わりにして、腰を無様に突きあげて、指や手のひらの柔らかさで、浅ましく感じてくれていい」

「そろそろそろっ、手コキも激しく、シッコシッコ……手首のスナップを利かせながら、君のオチンポを抜いてやろう」

「数値が上がってきた、もう出しそうなのだな、シッコシッコ。表情も声も、そして全てのデータが射精値を示している」

「ああ、いいぞ、あと少し」

「男性器の半ばまで上がった精子サンプルを、ほらほら、射精射精射精。3……、2……、1……、0」

「んんんっ……くっくっ、見事な射精だったよ。高さも量も、そして濃度も十分で」

「さて、尿道の中に残ったぶんも、すつきりと出させてあげる」

「私にとつても貴重なサンプルだからね。んふふっ、これで全部か？」

「見るからに新鮮で、イキの良さそうな精子だ。手にもねっとりと絡んで、匂いも濃厚で素晴らしい……んじゅるっ、ちゅるっ……ふはっ、味も、悪くはない……」

「女怪人の媚薬としても、エネルギー源としても使えそうだね」

「あふ、はぶっ……少量だが、最初に採れた精子だ、サンプル保存しておかなければ」

「ん、まだ終わりではない。検査はこれからだよ」

「実際の女性器を使って、その刺激の変化で、精子の質や射精量が変わるか見ておきたいからな」

「さて、始めるとしようか」

「どうした、怪訝な顔をして。この私が君の相手では不満なのかな？ 少なくとも容姿は、君の好きだった女だよ」

「それだけでも昂ぶるだろう」

「試験もスムーズに進み、私にとって不都合はない。さ、座ったままで、待っていてくれ」

「少し準備を……んんっ、ジッパーを下ろして、そら、私の女性器だ。見てくれないよ」

「大陰唇に、膣、クリトリスもある。少しほぐして、ん、ん、濡らしておかないと、試験に差し障りが出るからね」

「こうして指先で、軽くかき混ぜて、やれば……ん、ん……君のオチンポと同じように血流が集出して、桜色に膨らんで来る」

「クリも、そして陰唇もだよ、はふ、あふ……やはり性器をいじっていると、んふ、くふっ、少しばかり脈拍が上がって、はあはあ、呼吸も乱れて、しまう……これも膣が発情を促す器官として、機能している証拠だね」

「それに体が火照ってくる、ラバーの締めつけが、たまたまなく心地よくて、ギチギチと言う音さえ私を昂ぶらせる」

「さ、こちらの準備はできた。君のオチンポにもコンドームを装着して、これでOKだね」

「では今から、君に跨って——んっ、んんっ、んっうっ……奥まで、んふ、くふっ、しつかりと入らしてみたいだよ。さて、女性器での射精試験の開始というか」

「どうした？ じつとしたままで、私が動いたほうがいいのか？ だったら、ん、んっ、少しずつ腰を上下に動かしていくぞ」

「んふ、くふっ、だんだんの中で大きくなって、やはり膣の締めつけや、絡みつきが気持ちいいようだね。どうだ、私の女性器の具合は？」

「こうしたオチンポの試験のために、多少はセックス用にいじつてある。ん、んっ、普通のメスよりも遥かに、柔らかく吸いついて、くふっ、オスのザーメンを搾るのに最適化してあるからなっ、んっ、んっうっ……♡」

「はあはあ、こうして私自身楽しみながらも、んふ、くふっ、こんな風に動きを次第に速くして、んっんっ、君を一気に、はっっ、射精まで持つていくことも可能だ」

「ガチガチにそり返った君のオチンポ、もう出しそうなのだろう？ エラが硬く張って、んっっ、くっ、ビクビクと震えて、もう暴発寸前といったところか……っ……っ……」

「我慢は体に悪いよ。くふ、んっ……！ 私の中に、全てをぶちまけて、いいからね、んっっ、んっうっ……！ ふっっ、頑張るな君は。だが無意味だよ。もう限界はとっくに来ているのだからっ……」

「膣を引き締めながら、上下のピストンを2倍ほどに上げてみよう。ふっ、んっ……はあ、はっ……はっ……男性器がびくびくんびくんっとう動いているのがわかるよ。良い反応だ」

「私の膣の入り口から最奥までで、キミの男性器の全部を締め付けてあげようっ、んっ……ふー、ふー……んんっ、まだ出せるんだね。射精量も多くて素晴らしいよ」

「今で2回か……3回目も試して、連続射精量や耐久射精回数を確認したいな」

「ふうむ、やはり製造装置の生体部品に使うならば、その適正も見ておきたいところだね」

「ただ、連続で出してしまったせいか、立ちが悪いようだね。では、こういった趣向はどうかな？」

「仮想人格を……んんっ♡ んふふっ、ほらあ、君が好きな私が、すぐに出てくるよ」

「といつても、あくまでインストールされた人格だけど、あんっ、ちよと、んんっ♡ オチンポ、エツチに反応しすぎだつてば」

「私の中に入れてるつて思つて、一気に昂ぶっちゃつたのかな？ おまんこの中で、一気にガチガチになつて、はあはあ、こんなの組織の思うツボじゃない」

「ね、正義の味方君。しっかりしなさい。あん、あんあんっ、もつと頑張つて。んっ、んんっ♡」

「こんな悪の手先になんて、射精させられちゃ、ダメ、だからっ♡ さっきより、んあ、んああつ、いっばい腰振つてえ、君のオチンポ扱いちゃつてるかもだけどう、んい、んいっ、こんなことに、トロトロぬるぬるの彼女まんこに負けちゃダメえ♡」

「あひ、はひい、んいっ、大丈夫っ、キミの強さは私が一番よく、知ってるからあ」

「こんな卑劣な罠なんかに負けないつて、んあ♡ んあうっ♡ ほらあ、がんばれ♡ がんばれっ♡ 悪のおまんこに負けるなっ♡」

「こっやつて、あふ、んふう、腰を前後左右に揺さぶりながら、いっばい上下に振りたててえ、ぬちゅトロのドスケベオナホみたいにオチンポ抜きまくつて、君は負けないよね？」

「最後まで頑張つて、あ、ああ、あつああーっ、私のこと、救い出してくれるよね？ あはあ、あはあんっ、あああああつ♡ 励ましながら、おちんちんイジめてくるつて、そんなことないよお♡ あん、あんっ、気のせいだからっ、私がキミのこと、ずつと思つてたの知つてるでしょあ」

「向こうで何度かいい雰囲気になつて、キスまではいかなかったけど……んあつ、恋人の関係になつてもいいかなつて思つてたんだよ」

「好き、好き好き好きい、君のこと大好きい、だから頑張つてえ♡ 組織の研究者の罠に掛かつて、三回も射精させられるなんて、そんな情けない君、あ、ああ、私は見たくないよ」

「あつあああつ、もつと素敵な、かっこいい君でいてえっ♡ せえはあ、ごめんっ、君のオチンポ、気持ちよくつてえ、私は先にイっちゃうけど、君はダメだよ、イっちゃダメ」

「最後まで、気をしっかり持つて、悪を倒してっ♡ あひ、ふひい、こらあ、自分から君も腰、突きあげてきて、そんなの、あの女の思うツボだからあ、あん、あんあんっ♡」

「はあ、はあはあ、イクのは私だけ、君は私たちの希望だから、最後まで、諦めないで、耐えてほしいの♡ ああつ、イク……イクうう……大好きな君にっ、イカされちゃうっ……あつはあああああ

——んんっ♡♡」

「あんんんっ♡ 君つてば、射精っ、しちやったね……あゝあ、コンドーム越しても、熱と量のすごい、伝わってきた……もつと、頑張れると思っただけど、くすすっ、大丈夫、何度負けてもまた立ち上がって戦えるよ……」

「んんんっ♡ さて、こんなところかな」

「どうした、まだ物足りなさそうだね。今日の試験は終わりだ。これだけ出せば充分だろう」

「それとも仮想人格と、もう少し乳練りあっていたかったのか？ ふむ、思いつきだったがなかなか有用な方法かもしれないな。この方向での実験も計画してみよう」

「では、サンプリングの具合を確認するか」

「腰を上げて、んんんっ♡ ふむ、十分に精液は採取できているね」

「コンドームが裂けそうなほど、パンパンに膨れて、ゼリーのようにプルプルしか感じが薄膜越しに伝わってくる。まだ熱を持っていて、鮮度が十分に保たれている証拠だね」

「おっと、遊んでいる暇はないな。新鮮なうちに凍結保存用と、ナマで分析や実験に使うものを分けておかないと」

「ともかく協力に感謝するよ。正義のヒーローくん♪」